

中村和恵



ポスト植民地主義の思想

ガヤトリ・スピヴァック

清水和子 崎谷若菜訳

インド生まれのフェミニストが語る、他者の思考、野性の実践、多様性の哲学の行方。

四六判上製 定価（本体2913円＋税）

差異のダブルクロス フェミニズム批評の実践

エリザベス・A・メーシー

清水和子 岡村ひとみ訳

理性＝男性中心的な文化制度の中で誤読されてきたアメリカ女性作家の作品を逆構築する。

四六判上製 定価（本体2718円＋税）

気の向くままに 同時代批評1943-1947

ジョージ・オーウェル

小野協一監訳 オーウェル会訳

強制収容所と巨大爆弾の時代に、いかに正気を保つか、ウソを見抜くか。名コラムを初完訳。

四六判上製 定価（本体4800円＋税）

隠蔽された外部 都市下層のエスノグラフィー

西澤晃彦

寄せ場、日系人労働者、露天商等へのフィールドワークから均質な都市・社会観を衝く。

四六判上製 定価（本体2136円＋税）

彩流社刊 定価は1998年9月現在のものです

キミハトコニイルノ*目次

Ⅰ 東京・仲町迷路

ふらふら遊歩者 フラースーズ 8

月寒キ夜ノ風呂屋 12

あいかわらず、にもかかわらず、銭湯

15

わたしのニホンゴ、じじいの日本語

18

月と金魚 21

わたし、の境界線 24

天使は植民地に 27

資源回収憂世窮露 32

外の扉、中の扉 35

外の扉、中の扉(つづき) 38

トリニダードは、カリブソだ 41

デイオゲネスの缶切り 45

空にかえりぬ くう 48

風向き 51

Ⅱ 〈カラフルなシドニー〉

いろんな民族、それぞれのやりかた

56

ハットピン

58

異邦人の娘

62

おまえはきつと運がいいだろう

65

日本のステキなおネエさん

68

同性愛者、少数民族、バルタン星人

71

ツヨくてヨワイライスタイーン

74

混沌たるジパンダ

77

ポッサム

81

レッドファーン

84

長距離バス

87

アリスのペリカン

89

かえらない家

92

ステイヴ 95

白く光る浜辺 98

あおいあおい 104

ラジオ・マケドニア 108

明るすぎる場所 111

細まる道を、あらぬ方角に行け 114

植民地香港 117

Ⅲ 切り抜き帳

はげるまで考えない 122

まるじえりあ 125

本棚から舞い降りるものは埃ではなく

くたくたになつた本 131

「麻薬」と「重曹」 136

丘の下に埋めて 141

眼差し、呼び名 145

不確かな地平から 150

アジアティック・オーストラリア

外出禁止令パーテイ 157

手帳から 163

Ⅳ 王さまのオオサカ

汝に豆を与ふ 168

さまよえる外地人 171

あかん 174

甘くてもいいのだ 177

食うために生きよ 180

もつたいない話 182

トロイ脱出 186

「女」の仕事 189

堂山衣装哲学 192

ななしの縁起 195

震災 198

壊れた街 201

王さまのオーサカ 204

大阪発大阪行 オオサカ
テリジ 210

アジアコーヒー 218

タコヤキ、カリプソ、俊徳丸 222

*

こひなた日暮らし 228

あとがきにかえて 237

初出一覧 242

I 東京・仲町迷路

ふらふら遊歩者^{フラヌーズ}

九人住まいのアパートの表につけてある唯一の呼び鈴が壊れて久しい。階段下に設けた共同入口の扉には鍵がかかっている。この二重の防壁に妨げられて、新聞屋は集金ができない。おもわぬ長期戦の末とうとう我慢の限界にきたらしい、新聞がこなくなった。留守ばかりの隣の新聞が玄関に堆積していくのを有効に流用していたわたしも、当然新聞が読めない。世事にいよいよよくなる。テレビはもっていない。ずっと無視しているうちに電話もこなくなった。あんまり静かで頭がからんとかろくなり、散歩と食事ぐらいの役にしか立たない。そこで散歩に出かけた。

音羽通りを歩いていくとどこからか気の早い梅の花のよい匂いがして、ふらふらと知らない坂道を花を仰ぎながら上がってみると、古い洋館に辿りついた。まあ立派だねえ、博物館みたい。こんないいところがあるなんて。高く曲線を描くドーム状の玄関の前で立ち止まり、ふと見ると不似合いなスピーカーつきワゴン車が停めてある。どうやら某政治家の邸宅に侵入してしまつたらしいと気がついた。きた道を戻ってみれば、通りに面して鳩の頭が三つ集まつた

紋章のついた立派な鉄の門がある。よくこれを見逃せたものだと思えながらそのまるい鳩の頭を撫でると、防犯カメラか、ピーッと妙な音がする。すわ、と梅の枝を手に逃げ出した。

東京で暮らし始めてほぼずっと、大塚仲町に住んでいる。学生の下宿だから仮住まいのつもりで気軽に越したのに思わぬ長逗留になって、気がついたら同じアパートに居ついて六年が過ぎていた。このアパートを七篠アパートと呼ぶことにする。とくに名づける必要もないような場所、名無しの住処ということだ。

このあたりは戦争で焼け残った建物が多い。江戸時代のおさむらいの屋敷跡に大正になって憲兵隊の宿舎が建ち、それがあばら家と化して、軒にべんべん草が生えてもまだアパートに使われているというふうに、時間が積み重なった姿を見せているところである。古くからの名前のついた坂道がここに散らばり、曲がった道ばかりのいりくんだ地形をさらに複雑にしているため、歩くと道に迷う。六年たっても、まだ迷うのだ。とうぜん散歩が長くなる。散歩ばかりしているようなのだった。

そのうちに近所の、やはり散歩ばかりしているようなひとほはだいたい、顔がわかるようになった。

よっくん。大塚三丁目の交差点がテリトリで、そこでだいたい一日を過ごしている。交通違反をする車があると、どなる。ゴミを拾う。郵便局の前の花壇に座ってワンカップを飲む。

ミズノ文房具店の段ボール箱を畳む。ちょっと頭がゆっくりのせいかな笑うと子供みたいで年齢不詳。きつとわたしの親ぐらいの齡だと思う。いつも野球帽をかぶっていて、服装もちゃんと清潔にしている。街のひとはみんな彼を知っている。彼も住民は把握している。近頃わたしを見ると、よっ、と手を挙げるようになった。

目の上に長四角に切ったふさふさの白いきれを二枚貼りつけたようなまゆげの、作務衣さむえの上に羽織を着たご隠居。このひとはどこのひとなのかわからないが、よく茗荷谷みよがだの駅あたりを歩いている。おもしろいお顔なので覚えた。ときどき品のいい老婦人を伴っている。奥さんだろう。

お蕎麦屋の浅野屋のおじさんも、ご近所でよく見かける。子供を相手に野球をしたり、お店で宿題を教えたりしている。地域密着型のひとだ。お祭りのときにはいつも活躍。彼のおかあさんがこのあたりではよく知られた世話好きなひとだったらしい。

お店でいうと、西条酒店、田端膳写堂あたりが古くて、戦前からの町の様子をよく知っている。田端膳写堂のみどりさんはおばあさんというよりお嬢さんというかんじのひと。彼女に昔のマッチのコレクションを見せてもらったことがある。昔このあたりにあった「銀河」というミルクホールのマッチもあった。

ちりんちりんおじさん。通りにとめた自転車を持ちりんちりん鳴らすのが日課のひとである。ときどき、よその家のベルもちーっと鳴らしていく。家は菊屋青果店の裏手にあって、彼はい

つも窓辺に小鳥の籠のある部屋にいる。小鳥に話しかけている声が聞こえる。ぴーちゃん。呼びかける声が不安そうなきももある。ときどき激しく籠を揺さぶる。びびぴーちゃん。ぴーちゃん。通りで出会っても、彼はけっして目を合わせない。そのまま通り過ぎていく。

それから猫おばさん。しましまの毛糸のセーターと帽子のおばさんは、お茶の水女子大の裏門のところでのら猫に餌をやる。ほかになにをしているのかは知らない。はた目には、のら猫を助けるのが仕事のひとだ。あまりご近所に好かれていないらしい。むずかしいところだ。

浅野屋の隣の家の犬、パピィもどういうわけか、勝手に歩いていることが多い。パピィ、と呼ぶと耳を立てる。ときどきは立ち止まって近寄ってくる。たいていは知らないふりをして通り過ぎる。

こうしたひとびと（など）とすれ違いながら、坂下、仲町、小石川、小日向あたりを歩いていく。

彼らはわたしを、どう名づけているのだろう。

月寒キ夜ノ風呂屋

近所を散歩して、またしても道に迷った。三河屋酒店の三つ又の交差点に二度目に出たときには頭がへんになったような気がした。しかし通りがかる人もいないし、なんとか自分で道を見つけてはならない。助けてくれとつぶやきながらうろろと歩く。近所で遭難しながら考える。ここは、わたしにとっては不思議なところだ。日本とはこういう土地だったのだとすれば、わたしは日本を知らなかった。

わたしは札幌で育った。札幌は道がまっすぐなのだ。もちろんわたしが地形を一次的にしかとらえられない（点と点をつなぐことはできるが面を構築できない）という特異なあたまの持ち主であることも勘定にいれなくてはならないが、道はまっすぐなものだと思っている人間にとって、道なりに歩いて行って知らないうちに方角が違っているということは、信じがたい陥穽、それだけですでに迷路なのである。

なんとか春日通りにたどり着き、ひと息つく。あらためて北海道という日本の植民地について考えてみる。

植民地のボキャブラリーにはしばしば先住民の言葉がとりこまれている。アメリカ大陸や、オーストラリアでもそうだ。石狩、月寒、留萌、美唄、長万部、大槲毛、俱知安、留寿都。思いつくまま挙げてみるこれらの地名はすべて日本語ではなくて、アイヌの言葉を和風に読んで漢字を当てたものだ。イシカリ、という地名はそこを流れる蛇行する川を表現した「著しい屈曲」という意味のアイヌ語であると知って初めて、その地を知らないひとにも土地の姿が明らかになる。

地名の意味を知らないままその土地で暮らしていくこともあるだろう。だがすくなくともイシカリがアイヌによって意味づけられ読みこまれた土地だという記憶は、薄らぎながらも消えることなくその名を口にするたび蘇る。

いま、この国でいちばん大きい島に移り住み、部屋の窓のそとに竹という見馴れない植物がざわめき、冬のさなか濃い緑の椿の枝が揺れるのを見ると、言葉を与えられないままの違和感がざわざわと胸のなかで動き出す。わたしが知っているのは「倭人」の風土ではなくむしろ、あの北方の島の首都で、一度も親しく接することのなかった少数民族の記憶の中の風土に近いものなのだ。

しかしあくまで「近い」にすぎない。

地名は、風土の記憶の徴だ。ツキサップをわたしは知らないが、月寒はたぶん、知っている。純粹な文化などというものは見たことがないしあまり信用できるものだとも思わないから月寒

でいいと考えている。ツキサップの記憶をかすかに抱えた月寒という地名、わたしの知っている、内にもっている風土とはそのようなものだ。

ポケットに手を入れて坂道を歩きながら、そんなふうにもっと寒い街のことを考えた。

この辺は文京区といっても東池袋に近いあたりで外国人も多い。先日いつも行く銭湯が休みのため豊島区との境目にある別の風呂屋に行ったら、中国語の貼り紙があった。日本語訳がついている。

「服を着たままお風呂に入ってはいけません

浴室での洗濯は禁止します

入浴も日本の文化です

日本の文化を尊重しましょう」

ブンカブンカとうるさいノダ。もっとひらたく言えないもんかね。ブンカなんてそんな、確固たるもんかね。貼り紙を眺めていると、ガラガラと戸が開いて、日本髪のおばあさんが着物の上にコカ・コーラのロゴの入った布袋をたすきにかけて、ゆっくり入ってきた。こっちのブンカのほうが、ずっとリアル。ずっと、いかしているのだった。

あいかわらず、にもかかわらず、銭湯

銭湯はいい。なにより温帯モンスーン気候に合っている。春も秋も、雨季も、夏も冬も、立てこんだ街並みをカタカタ抜けて、湯船にポカリと浮かぶのは楽しい。サウナ／シャワー気候の札幌では、お風呂が「おいしい」という感覚はわかりかねた。札幌の親の家の近くに最近温泉が湧き、風呂屋ができたのだが、この建物がまず外観からして、シユール。巨大な船の姿の百貨店ほどもあるビルが周囲にレーザー光線を放ちつつ、吹雪の中にぼう々と浮かび上がっているのである。まあ、こんなものだろう。大塚仲町の大黒湯のほうが、時代錯誤の生き残りなんだろう。

ふみあまたともはよめれどおおつかの

とりやにたてばわらはべのごと

会津八一の歌に詠まれた「とりや」はいまもあって、ウサギやオウムの入った籠を店先に並